

しもべ聴く、主よ語り給え！

2016年7月17日 (東京 新宿 最終講演会)
奥田 昌道

「そのうちに」はアウト 「35-53」 神の大ドラマ 私は口ポット 主はサムエルを呼ばれた
神が人間に語りかける キリスト自身が神の言葉 神の語りかけを聴く場 十字架の下で 日本
人の宗教感覚 種蒔きの譬話 イザヤ書53章の土台の上に35章 自然のひと、神の霊 語り手は
主キリスト 言霊 神(キリスト)の言葉は人を活かす パンの問題 永遠の命に至る食べ物 我
を食らえ、我を飲め 派遣社員 良い羊飼いの神・キリストの栄光のために働く 苦しみの中に
輝きが生まれる 天の父の御心を行う者 使徒たちの言葉も受けとる 各人で「御言葉集」を作
成

●「そのうちに」はアウト

福音の世界というのは、「そのうちに」ではない。「今」しかない。ルカ伝11章に、

「招かれた者は多いが、選ばれる者は少ない」

とある。

「いや、ちよつと田畑を見に行かねばなりません」

「いや、何とかの都合であちらに行かなければなりません」

と言って、始めに予約しておいてOKが出ていたのに、みな断りはじめたという話があります。

この福音の世界もそうです。福音というのは「そのうちに」というような気楽なものではない。明日にも終わりが来るかも知れないという、切羽詰まった中で語られているのが福音なんです。世の終わりは近い、今にも終わりは近いという。特にイスラエルではエルサレムの滅亡ということも直前に迫っておりまし、それは危機的状況なんですけれども。それは今だつて我々も変わらない。世界で何が起こるか分からない。自然災害もあります。それから、人為的な爆弾テロだとか、やれ何だとか、本当にとんでもないことがあちらこちらで突如として起こったりします。いつ誰がそこに巻き込まれるかわからない。

だから、非常に人間というのは不安定な中に生きていると思わざるをえない。東京だつて直下型地震というのが襲ってくれば、皆さんはどうしようもないわけです。事前に防ぎようもない。我々は地面の上にしつかり立っているつもりだったのに、そのしつかり立っている地面がグラグラしたら、もうこれはしょうがない。上から何が落ちてくるかわからない。そういう非常に不安定な環境の中で我々は現代生活を送っているわけです。そしてテロなんていうのがあちらこちらで本当に続発しておりますし、そんな中で、そしてそれ



ぞれのご家庭でいろんなご予定もあるでしょうし、日常生活を送っていらつしやるわけですから、そういう日常生活の中でやはり、

「これだけは絶対に手放さない。これだけは命よりも大事だ」

という、それがキリストの福音だと私は思っています。

だいいち、キリストはご自分の命をあげよう

「命懸けであなた方に本当の命をあげよう」

と。とにかく、すべては消え失せていきます、この地上のものは。どんなものだって、永遠するものではありません。見えるものはすべて一時的なんです。我々は自分の身体もそうですし、すべてそうです。親しい者との繋がりもすべてこの地上では永遠ではありません。永遠なるものは天の次元に属するもの——天の次元に属する神さまの次元、霊の次元——その次元のものは永遠なんです。

「見ゆるものは一時的であり、見えないものは永遠に続く」

と、コリント後書4章の所にあります。

「¹⁶この故に我らは落膽せず、我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々
に新なり。¹⁷それ我らが受くる暫くの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き

光栄を得しむるなり。¹⁸我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」(コリント

後4・16〜18)

という御言葉とか、それから、ヘブル書なんか見ましてもそうです、

「いま一度、地を震う」

ということが出てきたりする。

「イエス・キリストは昨日も今日も永遠に変わり給うことなし」

という言葉が出てくる。

とにかく、私はこの新約聖書を——これは詩篇付きの文語訳ですけれども——これを愛用してまして、どこを開いてもキリストの生命の言葉が浴びせかかるように躍り込んでくるといふ感じを受けるんです。そして何も福音書だけではありません。そういったキリストの生命を受けた方々が書かれたパウロその他の使徒書簡、それからヘブル書なんて誰が書いたかわかりませんが、実に素晴らしいことがいろいろと書かれてある。それから、ヨハネの手紙とか。

最後の黙示録は、私にとってはまだまだ遠い、難しい存在で、ちよつと敬遠しておるんですけれども。ただあそこにならって、

「あなた方は熱いか冷たいかどちらかであってほしい。生ぬるいものは吐き出すから」

と書かれています。福音の世界は熱血漢の世界なんです。本当に、熱いか冷たいかのど



つちかだ。ぬるま湯でダラダラダラダラしているのはだめだと。そういう燃える世界ですね。そういった燃えるものをやはりキリストは持つておられた。

「この火すでに燃えたらんには何をか望まん。されど、我には受くべきバプテスマあり」

と。キリストは常に命懸けですよ。そして、本当のものを与えようと思っていろいろなことをされたのに、人々は相手にしなかった。弟子たちもわからなかった。すべてペンテコステによって初めて弟子たちも目が覚めたという、そんな歴史があります。

講演会で小池辰雄先生もよく言っておられたんです、

「瞬間をつかんでくださいよ」

と。ですから、この講演会のご案内を受けられて、

「またそのうちに」

なんて思った方は、もうアウトです。もうチャンスはありません。今日来られた方は、その意味では幸いだと、そんなふうに思います。これは福音というものの性格です。そういうことをまず一言申し上げたいと思います。

●「35」「53」

それからもうひとつ申し上げたいのは、

「私はこんど大病を患いました」

なんて大袈裟なことを言ってますけれども——本当に私にとっては大病ですよ。十日間ほど咳き込んでしまって、夜あまり眠れない。喘息ぜんそくの人の苦しみというのがよくわかりました——まあそんなことで、いろいろ考えたのですけれども。ひとつは、人生というの——孫の翔君がよく、テレビの水戸黄門の主題歌で、

「人生、楽あれば苦もあるぞ」

と歌っていました——あの「人生、楽あれば苦もある」というのは、聖書で言ったらどういうことになるか、誰かわかりますか。

「35」「53」(53分の35)

これなんです。「人生楽あり」というのはこの「35」、イザヤ書35章の方で、天国の世界です。

「53」は、イザヤ書53章で、言うまでもなくキリストの受難、キリストの十字架を表している。私たちの人生というのはこの「35」「53」(53分の35)、このとおりだと私はつくづく今回思いました。単なる「35」というのはありえない。この「53」に支えられての「35」なんです。

「53」があれば必ずそのかなたに「35」が待っている。

「それを忍耐して待つ」

とローマ書の中でパウロが言ってます。ですから、この「35」「53」、これは小池先生がよくお書きになりましたよ。イザヤ書の53章と35章、この部分だけは特別に大事していただき



たいと思います。

●神の大ドラマ

そんなことが今日の前置きでござります。今日のお話は、

「しもべ聴く、主よ語り給え！」

というタイトルです。なぜ、こんなタイトルを掲げたかと言いますと、やはり我々はまず聴かなければいけない。我々の福音の世界というのは、自分の頭で作りあげる哲学者の世界ではない。哲学者は、自分の頭でいろんなものを、世界を築き上げていくのだと思えますけれども、我々はそうじゃない。自分の想像で、

「世界はどうやって創られたか、歴史はどうなっているか」と、そんなことじゃないんです。

歴史といえば、旧約聖書からイスラエル民族の歴史、それから神の天地創造の歴史、そういうったものがあります。今日の「しもべ聴く、主よ語り給え！」のサムエル記も旧約聖書です。我々の福音の世界というのは、自分で作りあげる、作り出すような世界ではありません。何といつても、主人公はキリストですから。キリストを中心にした神さまの歴史です。しかも、神さまの歴史は救いの、人間を何とか救い上げようとする、そういう歴史なんです。それはもう創世記からずっと一貫しているわけです。小池先生はそれで

「聖書は神の大ドラマである」

という表現をなさいました。とにかく我々は、聖書というものを離れてキリスト道はないです。自分たちで作り上げられるものではない。まず、神さまから与えられる啓示けいじなんです。上からの啓示です。最大の啓示はキリストご自身が最大の啓示ですから。旧約の世界だって、

「アブラハムよ、アブラハムよ」

と、神さまの方から呼びかけているわけです。また、モーセは

「モーセよ、モーセよ、お前はそこで何しているのか。お前には大事な役目がある。イスラエルの民を救い出すんだ」

と、すべて神さまの側から働きかけられて、

「は、はあ、おそれいました！」

という、そういう世界なんです。自分たちの野望によって何かやろうなんて思っていない。旧約聖書で神さまに用いられているご連中はみんな、

「私はそんな器ではありません」

と、逃げ回っているけれども、

「逃げてはいかん。私はお前を捕まえた。私はお前を用いるぞ」と言われる。

モーセは始めはかなり民族愛に燃えていた。同胞が喧嘩しているので、



「だめだ、だめだ。同胞ではないか」と言ったら、

「お前は昨日、イスラエル人を救おうとしてエジプト人を殺したな。もうバレているよ」

なんて言われたので、恐くなって、ミデアンの荒野に逃げて行った。そこで奥さんに出会って、40年間静かな生活を送っていた。80歳になった時に、

「モーセよ、モーセよ」

と、来たわけですよ。それから40年間、あの出エジプトという大事業を成し遂げて、120歳で天に召されます。モーセは神さまから呼ばれて、そして使命をいただいて、しかも、

「それを実行するには、お前の力ではできない。私がついているから」

と、杖をいただいた。その杖がいろんな不思議な業わざをやってくれます。神さまに呼ばれ、神さまから力をいただいて、それに乗っかって、モーセはやっただけです。決して、モーセは自分でやったなんて、本人も思っていないでしょう。アブラハムもそうです。

「アブラハムよ、アブラハムよ」

「私には子どもがないんです」

「いや、お前の腰から生まれる子どもがお前の正統な子だ」

「そんなこと仰いましてよ」

なんてゴチャゴチャ言っただけで、お婆さんから子どもをつくったりなんかしますけれども、それは全部だめですよ。やはり、ちゃんとイサクという約束の子どもが生まれたいといけません。そして、「アブラハム―イサク―ヤコブ」とずっと続いていくわけです。

この旧約の歴史を見ましたら、まずは神さまがご自分の計画を成し遂げるために人をお使いになる。アブラハムという存在がないと始まらない。モーセという存在がないと始まらない。そんなふうには、人をお使いにならない。

自然現象は、雷が鳴って木に落ちたら、木が燃えます。村に落ちたら、火事が起こります。そこからは何も始まらない。自然現象ですから。けれども、神さまは人を通して御業みわざをなさる時は、言葉ことばを賜たまわります。言葉ことばを賜たまわります。それがここに記録されているわけですよ。

私が思いますのに、果たして日本の神道というのはそういう言葉とあるものがあるのだろうか。わからない、私は知りません。仏教はいろんなものがありすぎて困っています。もの凄く多くの教典があつて、それにまた解釈をめぐっているいろいろと派に別れてやっています。

では、キリスト道はどうなのか。この聖書一巻です。この聖書一巻というのはイスラエル民族の歴史ではありますけれども、その神さまがいかにしてご自分の民イスラエルを――

「頑かたくなでどうしようもない」

と散々書かれています。



「頑^{うなじこわ}なで項強^{うなじこわ}くして」

と、イザヤもイザヤ書の中でずいぶん嘆いています——そういったどうしようもない民を捕まえて、それをグイグイ引つ張つて行かれる。その始めはアブラハムだし、アブラハム、イサク、ヤコブと来まして、それからモーセですよ。途中でヨセフという素晴らしい、エジプトの宰相^{さいしやう}となった人がいましたけれども。

●私はロボット

とにかく神さまの方から働きかけて、言葉を与えて、その言葉を実現して行くという。これは素晴らしいと思います。つまり、言葉を与え、その言葉を実現する。

「言葉を見張^{みはり}っているよ」

という、そういうのがアモス書かどこか出てきます。とにかく、神さまの方が働きかけて、人間を捕まえて、そして、その者に言葉を与えて、

「どうだ。お前は言葉を受けとつた以上はその言葉どおり動け」

と、そうやってグイグイ引つ張つて行っている。そういう感じですよ。だから、この「しもべ聴く、主よ語り給え！」

というのがまたそうなんです。自分の勝手な思いで、勝手な意志で、「これは神さまが喜ぶのではないか」といふようなことをやるのではない。

「まず、お語りください。あなたの御言どおりに私は歩みたいですよ」

と。これがキリスト道なんです。だから、

「^{はじめ}太初^{ことば}に言^{ことば}ありき。言^{ことば}は神なりき」

と、ちゃんとあのヨハネ伝にありますように。そういうふうには、私たちがいただいている聖書、そしてキリスト道というのはまず、

「主よ語り給え！ しもべ聴く」

という、

「あなたのご意向をお聴かせください。私はそれに従つてそのとおりに歩みます」

と。なんとイエスご自身がそうじゃありませんか。

「私は自分からは何もしない。自分からは何もしゃべらない。すべて父なる神さま

が私の中で、『せよ、語れ』と仰ることをそのままやっている、私はロボットだ」

と。イエスはロボットだと言う。小池先生は「無者」と言われた。私は「ロボット」と言

おうかな。神さまに操^{あやつ}られてる操り人形みたいな姿がイエスという方のお姿だと思う。

「私の言葉は私の言葉ではない。父が私の中で働いて語っておられる。私の業^{わざ}

は私の業ではない。父が私の中で働いて御業をなさっているのだから。私を

見た者は父を見たのである。父と私とは一つである」

と言われる。本当に完全に一つになっておられた。いまだかつて地上でナチュラルに神さ



まと本当に一つになっていた人なんかいないですよ、歴史を見ましても。やはり、キリスト・イエスというひとだけがナチュラルにちゃんと神さまと一つになっている。本当に素晴らしいお方です。

それはしようがない。神の霊によつてマリヤさんから生まれたのだもの。イエスというお方は半分、人間ですわ。マリヤさんの血を受け継いでいるから。でも、ヨセフとは関係ないわけですよ。男性側の部分は何かというところ、聖霊が直接入ってきて、その部分の役割を果たされたという。必然的に神的な、神さまの神霊という、神の霊の要素が入りこんでしまった生まれ方をなさっている。12歳の時に神学者たちと議論していて夢中になっていて、お父さんたちは先へ先へ帰って行って、気がついたら息子がいない。どうしたのかと引き返してみたら、大人たちと一緒に議論をやっている。

「私たちはどれだけ心配したことか」と言うところ、

「私はお父さんの家にいるのに、お気付きになりませんか」

と、とぼけているでしょ。12歳ですよ。そういう少年イエスの不思議な所が出てます。要するに、神さまの言葉の受肉体なんです。しかも、たえず

「父よ、あなたの御意を。私の意ではありません。あなたの御意を」

と、自分を父なる神さまに差し出しておられたのがイエスさまのお姿でした。それは祈りという姿で出てくるわけです。

祈りというのはイエスの場合は本当に——弟子たちはまだまだだめですから——自分一人で山に籠もって、そこで夜を徹して祈られたのは、そこでは本当に一番親密な父なる神さまと一つになれる時間だったのではないかと思えます。

イエスは父の御意を受けとって、それを実現しようとなさった。我々は、ここに書きましたように、

「どうぞ、お語りください。私は聴きます。お語りくださったとおりになさせてください」

と、これが我々のあるべき姿だろうと思えます。

●主はサムエルを呼ばれた

それが今日のタイトルです。「しもべ聴く、主よ語り給え！」と。それでは、配布のプリントの「講演の趣旨」という所から順番にたどっていきましょうと思えます。

《講演の趣旨》

旧約聖書サムエル記上3章に少年サムエルが主の呼びかけを聴く場面が記されている。その要点は以下のようである。

「少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。……ある日、エリは自分



の部屋で床に就いていた。……³……サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。⁴主はサムエルを呼ばれた。サムエルは、「ここにいます」と答えて、⁵エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかし、エリが、「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」と言ったので、サムエルは戻って寝た。

⁶主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。⁷サムエルはまだ主を知らなかったし、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。

サムエルはまだ主を知らない。サムエルの側からは神さまのことは知らない。しかし、エリという自分の仕えるべき方の所で修行しているわけですよ。そのサムエルに今度は、神さまの側からサムエルを捕まえようとなさるという場面です。

⁸主は二度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って元の場所に寝た。

¹⁰主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

エリは、「主よ、お話しください」と、「主よ、とまず呼べ」と言っているのに、サムエルはまだ主を知らないからでしょうか、ここで「どうぞお話しください。僕は聞いております」と、それだけ言って、「主よ」という言葉はありませんね。

¹¹主はサムエルに言われた。「見よ、わたしは、イスラエルに一つのことを行う。それを聞く者は皆、両耳が鳴るだろう。¹²その日わたしは、エリの家告げのことをすべて、初めから終わりまでエリに対して行う。¹³わたしはエリに告げ知らせた。息子たちが神を汚す行為をしていると知っていないながら、とがめなかつた罪のために、エリの家をとこしえに裁く、と。¹⁴わたしはエリの家について誓った。エリの家告げは、いけにえによっても献げ物によつてもとこしえに贖われることはない。」

これは大変なことです。どんな償いの献げ物、いけにえを献げようと、いろんな献げ物をして、ゆるされることのないもつとも重い罪であるという。こういうきついお告げがありました。

¹⁵サムエルは朝まで眠って、それから主の家の扉を開いた。サムエルはエリにこのお告げを伝えるのを恐れた。¹⁶エリはサムエルを呼んで言った。「わが子、



サムエルよ。」サムエルは答えた。「ここにいます。」¹⁷エリは言った。「お前に何が語られたのか。わたしに隠してはいけない。お前に語られた言葉を一つでも隠すなら、神が幾重にもお前を罰してくださいるように。」¹⁸サムエルは一部始終を話し、隠し立てをしなかった。エリは言った。「それを話されたのは主だ。主が御目になうとおりに行われるように。」

¹⁹サムエルは成長していった。主は彼と共におられ、その言葉は一つたりとも地に落ちることはなかった。²⁰ダンからベエル・シエバに至るまでのイスラエルのすべての人々は、サムエルが主の預言者として信頼するに足る人であることを認めた。²¹主は引き続きシロでご自身を現された。主は御言葉をもって、シロでサムエルにご自身を示された。¹サムエルの言葉は全イスラエルに及んだ。（サムエル上3：1〜4：1）

●神が人間に語りかける

私はなぜここを引っ張り出したかというところ、その次に書いてあります。とにかく、旧約聖書を見て驚いたのは、神さまは親しく

「アブラハムよ、アブラハムよ」

「モーセよ、モーセよ」

と、神さまご自身が人間に語りかけているということにびっくりした。皆さんは、驚かれませんか。というのは、皆さんはそんな語りかけを聞いたことがありますか。本当に名前を肉声で語りかけられてごらん。

「はっ、どなたですか」

とびっくりしますよね。私も全然、経験ない。皆さん、どなたかおありでしょうか。でもやはり、本当の信仰の道、神さまに仕える道は、まず御言みことばが臨んできて、

「あなたはかくあれ。私はあなたにかくあることを望む。あなたはこの世でかくあれ」

と、御言が先にきて、

「はい、わかりました。そのとおりにいたします」

と。これが本来の姿なんです。特に旧約聖書で出エジプト記20章がそうです。ああいう十戒が与えられる。それから十戒を今度具体化するような細かい律法がいくつも与えられる。それを全部、イスラエルの民は、

「このとおりにやります」

と言う。しかも、神さまはああいった律法を与えられるときは、必ずご褒美が付いているんです。

「このとおりにすれば、こういう御利益ごりやくがある。これは生命に至る道だ。しかし、こ



れに背いたら地獄が待っている。お前たちはどうだ」

「はい、生命の道を選びます。ばんざい！」

とやっているわけです、イスラエルの民は。でも実際は全然やれてない。しかも、あれは出エジプトという凄い体験をしたあとで語られている。あれだけの凄い体験をしたのだったら、それは神さまからいろんなお言葉がきたら、それはもう

「はい、どんなことがあつても、命にかえてもそれをやります」

と言うのが当たり前だと私は思うんですけれども、実際はどうですか。出エジプトが終わって、荒野の中に入って、三日間歩いて、水がなかった。もうブツブツ言い出した。三日間食べ物がない、飲み物がない。そのたんびにモーセの首ねっこをつかんで、

「お前は実はここへ連れ出して、俺たちを殺すつもりだったのだろう」

なんてことを散々言っている。出エジプトの時、あの紅海を渡って来た時にどれだけ「ばんざい、ばんざい！」とやっていたか。ところが、三日旅路をして、

「水がない。食べ物がない」

と言い出すと、もうコロツと変わって、モーセを責めまくっている。そのたびにモーセは一生懸命に、

「なんとかしてください」

と祈って、岩を叩いたら、バーツと水が^{ほとぼし}迸り出たとか。それから、朝になったらマナという、ウエハスのようなものが地上いっぱいにあつたとか。イスラエルの民が、

「肉が食いたい。エジプトでは肉があつた」

と言ったら、うずらが飛んできたとか。まあよく、神さまはがまんしてやっておられる。そういう箇所があります。

要するに、私がこういうのを書くきっかけになったのは、アブラハムにしてもモーセにしても、神さまは親しく声をかけて呼んでおられるということにびっくりした。自分たちはそこまで直接に神の声を聴いただろうか。だから、さっき

「直接聴いた方はいらっしやいますか？」

と聞いたら誰もいない。では、どうして福音の中に安心して歩んでいらっしやるのか。

「それは我々にはキリストさまがいらっしやるからだ」と、皆さんは言うでしょうけれどもね。

旧約書を見ますと、神が直接人間に語りかけているということ。それに私は驚いたというのが、こんなものを作るきっかけになった。では、現代はどうなんだろうか。そういうことがお話の順序になります。

●キリスト自身が神の言葉

《旧約聖書においては、神はアブラハムやモーセに対し、その名を呼んで親しく語り



りかけておられる。そのことに私は驚いた。新約聖書においてはどうかだろうか。また、現代に生きる我々は、どのようにして神の語りかけを、神の言葉を聞くことができるのだろうか。

使徒パウロは、

「実に、信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことよって始まるのです。」(ローマ10・17)

と言う。また、ヘブライ人への手紙の冒頭には、

「神は、かつて預言者たちによつて、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、²この終わりの時代には、御子によつてわたしたちに語られました。」(ヘブライ1・1〜2)

と記されている。》

つまり、昔は直接に神さまが、「アブラハムよ、モーセよ、イザヤよ」という形でご自身を顕されたけれども、現代は、キリストの新約の時代では、キリストご自身が神の言葉であり、キリストご自身が我々一人ひとりに語りかけてくださっていると、そういうふう位置づけられております。

これは二千年前のそういった新約の時代、あるいはその直後の時代だけではなくて、現代もやはりそうだろうと思う。私たちにはこの聖書が与えられている。特に新約聖書の中にキリストのお言葉が、キリストのお働きがビビッド (vivid) ありありと描き出されています。それに触れることによつて、キリストが語られたのは遠い時代の遠い所での語りかけであり御業^{みわざ}なんですけれども、それは二千年後の現代でもやはり同じようにキリストは我々に、それをもつて語りかけていらつしやる。そういう受けとり方をしないと、単なる過去の物語とか、そんなことでは全然効き目がないんです、このお薬は。このお薬を効き目あるものにしようと思つたら、

「今、現に私に向かつてこの御業を展開しておられる」と言つて、受けとることです。

二匹の魚と五つのパンで五千人の人を養われたという話が出てくると、

「あつ、キリストご自身の御身体^{からだ}を裂いて、今も私たちにそれを食べさせ、飲ませ、

そして生命付けてくださっているんだ」

と受けとつて、すべて福音書に描かれている御業^{みわざ}や御言^{みことば}というものは現代の私たちにもなお生き生きと語りかけ働きかけてくるという、そういう受けとり方をしないと、これは読んだことにならないんです。文字面^{づら}をたどつても、それは全然、力にならない。生命にならない。

「我を食らえ、我を飲め」

とキリストは仰いました。



「神の業とは神のつかわした者を信すること、これである」と言われました。そんなふうには、キリストが語られたことは二千年前ですけれども、現代の私たちにも、十分に新しい響きをもつて通用するものとして迫ってくる。そういう受取り方をいたします。

● 神の語りかけを聴く場

次は、

《Ⅱ 神の語りかけ(御言葉)を聴く場——それは、十字架の下で——

という所。これは大事なことです。私たちが御言を聴く、どんな態度で聴くのか、どういう場で聴くのか、それを「十字架のみもとで御言葉を聴く」ということだと私は思います。

聖なる神、そして霊なる神の前に、「肉なる人」が

「肉なる人」というのは、あるがままの生まれながらの人間ということですよ。

そのままのすがたで立つことはできない。ルカによる福音書18章13節の徴税人(取

税人)が、

パリサイ人は、「私はこんな立派なことをやりました。一週間に二度断食して、施しはこれだけやっています」と、胸を張って祈った。ところがもう一人、取税人は鳥居の外に居る。鳥居の外で胸を打ちながら、「罪びとなる私をお赦してください」とだけ言って、こうべをたれて帰った。ところが、キリストは言われた。「神さまに義とされたのはこの立派なことをしたパリサイ人ではない。あの鳥居の外で胸を打っていた取税人の方だよ」と。こういうことをキリストは言われました。

「遠くに立つて、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら、『神さま、罪人のわたしを憐れんでください』と言った」ように、うなだれる外ないのほかが私たちの姿である。

これが我々のいつわらざる姿です。聖なる神さまの前には、私たちは直接には前に出られない。そういう人間です。

それでも、祈らないではいられない。神の御言葉を、神からの語りかけを待望せずにはおれない我々は、どうすればよいのか。

我々が聖なる神の御前に出るとき心のすがた、姿勢は、「砕け」「平伏し」以外にはない。

これも小池先生がしよつちゅう言っておられました。

しかも、それは、「十字架の下」である。

人間の単なる砕けとか、単なる悔い改めとか、平伏しとか、そういったものではない。小池先生は、

「本当の砕け、本当の平伏ひれふしは十字架が与えている。我々は砕けようにも砕け得ない。



そういうふうしようもないやつだ。砕け得ない我々に代わって既に砕かれてくださっているのが十字架である。だから、キリストは十字架で砕かれたもうた。それは我々に砕けを賜うためである。我々はキリストの砕けをわが砕けとして無条件にいただく。それが我々の側の平伏しということになるんだ」

というふうに言ってくださいました。それをここで書いたわけです。

最後の晩餐の席でペテロの足を洗われた主イエスは、「わたしの足など、決して洗わないでください」と辞退するペテロに対して、

あの最後の晩餐の席でペテロは——キリストがずっと弟子の足を順番に洗っていていかれた時に——「いやいや、おそれ多い。もつたいない。先生に足を洗ってもらうなんてとんでもない。できませんよ」と言って、ペテロは純情だから、そうやってお断りしました。その時、キリストは何とお応えになったか。

「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもない

ことになる」と答えられた。(ヨハネ13・8)

話は足の話でした。けれども、キリストからすると、足を洗うという姿で全身を洗ってあげるということ。足という部分を清くするのではない。

「私があなたの全部を引き受けなかったら、あなたは私とは縁がないよ」

と。そういうことを仰った。自分で自分を洗えない。自分で自分を清くできない。これが人間の姿なんです。「砕けろ」と言われたって、砕け得ないんです。「平伏せ」と言われたって、本当に平伏せない。それに対して本当の砕け、本当の平伏し、それを十字架が賜っているということなんです。

●十字架の下で

したがって、私はここに書きました。

《わたしたちと神(キリスト)との関わりの鍵はここにある。神(キリスト)の側から、わたしたちが恐れなく御前に出ることができるようになってくださった。十字架の贖罪の御血潮で既に「全身を」洗ってくださった。「罪なき者」「私心なき者(無者)」としてくださった。この自覚の下で、平伏しの心、砕けの心で、「しもべ聴く、主よ語り給え!」と呼びかけることができるのである。》

これが私の自覚です。また、語ってくださる中味が大事なんです。そのことばの次元はこの世の次元ではない。この世の金儲けの話ではない。「しもべ聴く、主よ語り給え!」「よしよし、わかった。今日はあの株を買いなさい。儲かるよ」なんて、そんなことじゃない。この世の次元ではない。神さまがお語りくださる次元、キリストが語ってくださる次元はこの世の次元ではないんです。

「神と富とに兼ね仕づることあたわず」



と仰った。富の次元、この世の次元ではない。神の霊の次元、その次元のことを語ってくださる。だから、それをこつちもいただかないといけない。ところが、福音書を見てましたら、この世の人たちはこの世のことばかりを思っているわけです。やれ病気を治してほしい、やれお金持ちにしてほしいとか。キリストが与えようとしているものはそんなものではない。それを越えた永遠の生命の世界、神さまの次元の本当のものを与えようとなさった。そこでたえずすれ違いが起こっております。我々は決してそういうすれ違いが起こらないように心しなければなりません。ですから、ここで

《語り給う次元は「天の次元」「霊の次元」である。したがって、聴く者もその次元において聴くのでなければならぬ。ヨハネによる福音書3章の「ニコデモとの対話」において語られたように、

「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

「だれでも水と霊によつて生まれなければ、神の国に入ることとはできない。」

肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」

これは素晴らしい言葉です。要するにキリストがもたらされた次元というのは天の次元、その次元の永遠の生命の世界。そこへ入るには、罪が贖われなければ、その次元に我々を入れてもらえません。だから、まずキリストは我々のために贖いということをやさつて、場を作ってくださいました。贖いというものを通つて初めて、神さまの生命の霊の世界に我々の魂が生きることができるよう。そういうふうな土台を作ってくださいました。そのことがあのヨハネ伝3章の所に出てくるわけです。

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。すべて彼を信ずる者が永遠の生命を得るためである」

と、ちゃんとヨハネ伝3章に十字架が出てきています。

この新しい誕生も、主イエスの十字架が与えてくださる。また、それ以外に道はない。「生まれながらの人間」の在り方を「肉」という。自己中心であつて、神よりも自分を大切にする。自分に都合のよい限りで神に従う。神は、自分の幸福な人生に仕える「自分のしもべ」であつて、自分が「主」となっている。《

こういうクリスチャンが今でもいるのではありませんか。

「要するに、クリスチャンになつたら何でいいの？」

「いいことがいっぱいあるからさ。癒しもいただけるし、金も儲けさせてもらえる。

何でもある」

と。そういうクリスチャンがもし世の中にあふれているとしたら悲しいことです。本当のクリスチャンというのは、キリストがご自身を神に献げられたように自分を献げていくという心根がなかったら、クリスチャンではない。そこをはっきりしたいと私は思います。



● 日本人の宗教感覚

この世の宗教、民間信仰は御利益ごりやくです。どここの神様の所に行けば、こういう病気が治る。出雲いずもの神様の所では安産を約束してくださる。すべてこの世の幸せを約束しているのが日本のいろんなお宮さんや神社仏閣だと、私は思います。それを日本人はみな受け入れています。そして、それぞれ分業ですから、出産だったらこの神様、お金の方だったら恵比寿えびす様とか、いろいろあつて、総合病院もあればいいんですけれども(笑)。

まあ、日本人の宗教感覚というのは、私はそんなふうを受けとる。だから、年始になれば明治神宮へ行くは、どこどこへ行くは、いろんなはしごをやってますよね。京都だったら節分の頃になると、あの吉田参道というのがものすごく繁盛する。あれはお菓子の神様だったかな。そんなふうには、日本の神様は分業態勢をやっている。学問の神様は菅原道真すがわらみちざねとか——私も菅原道真ぐらいにしてほしいな、誰か神社を作つて(笑)——ま、そういうふうな、人間のちよつとましなのが神様になつてみたり。それから、せいぜい分業態勢ですよ。しかも、中味はこの地上の約束、「幸福」なんです。

ところが、イエスさまのお約束なきつた福音の中味はレベルが違います。だから、日本人が受け入れられないのはしょうがない。だいたい日本人は、

「それをやったら何か御利益がありますか。いくら金出せばいいんですか」と、こうでしょ。つまり、自分がどれだけの対価を払えばどんなふうな御利益があるかという、そういう観念で生きてますから。

キリスト道というのはそんなものと全然違うレベルです。そういうことを言うと、

「お高くとまっていますね。あんたらはインテリだからそんなこと言つて暮らして

いるけれども、我々労働者はね……」

なんて言われるかもしれない。私はまだ聞いたことありませんけれども、何だかそんな予感がする。ここで書きましたように、

「語り給う次元は『天の次元』『霊の次元』である」

ということ。ですから、皆さんがいろんな福音の話を人々にお話しなされて、サツと受け入れてもらわなくて当たり前です。サツと受け入れてもらう方が不思議なんです。次元が違ふんだもの。この世の人たちが求めている次元と、キリストが与えようとなさっている次元とは、これは「月とスッポン」というくらい違ふんです。天と地くらい違ふ。だから、それで我々が福音を伝えようとして、受け入れられないでガツクリ来る——まあ、ガツクリ来てもいいけれども——すぐ、

「あつ、これが当たり前なんだ、これが人間なんだ」

と、こう思つていただくことが大事ではないかと私は思います。



●種蒔きの譬話

《これと正反対の在り方がイエスの神に対する在り方であった。主イエスは、父なる神に己を捧げ、御心の成就のみを願われた。その在り方こそが、「霊」なる在り方であった。サマリヤの女に対して、

「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。」(ヨハネ4・24。文語訳聖書では、「霊と真とをもて」と訳されている)

と語りかけておられる所にも表われている。》

それから、種蒔きの譬話があります。どういう種がどんな実を結んでいったか。石地に蒔かれた種、茨の地に蒔かれた種、それから良き地に蒔かれた種、それによって違ってくる。最後の良き地に蒔かれた種は三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ。しかしながら、茨に蒔かれた種は、始めはちよつと良かったんだけど、いろんなこの世の富、家族の問題とか、いろいろこの世的ないろんな思い煩いが塞いでしまつて、実を結ばなくなるとあります。石地に蒔かれたのは、日が照つてくると根がないのですぐに枯れてしまつた。もつとひどいのは、着地する前に鳥がついばんで持つて行つてしまつたという。そういう話がありますね。(マタイ13・1〜23)

私たちが福音を人々に伝える時にも、そういう姿を想定してないといけません。たとえば、トラクトを配るとして、百人に配つて、まず一人でも真剣に受けとれば、もう「めでたし、めでたし」くらいのつもりでないとね。そんなものを受けとつてポイと捨てる。そういうのを「猫に小判」と申します。あるいは「豚に真珠」と言います。豚に申し訳ないけれども。つまり、時が来てないんです。その人たちが求めているこの世の幸せというものと、福音が与えようとしている本当の「永遠の生命」の世界とはあまりにも違いすぎるんですよ。この世の人たちは、永遠の生命なんて要らんのですわ。この世で幸せに暮らしたら、それでもう十分なんです。

私も始めはそう思つてましたもの。そんな永遠の生命なんてとんでもない。私はもうその日その日がしんどくてたまらない。朝起きるのがつらい。

「また今日も一日が始まるのか」
と、うなだれてしか生きていられなかった。

「今日一日をしっかりと歩ける力をいただけるなら、思い煩いをとつぱらつていただけるなら、それでもう十分だ。そんな永遠の生命なんてとんでもない。そんなことはとてもじゃない。私の願いはそんなものではありません。今日一日を精いっぱいやらせてください」

と。そういう願いだった。ところが、キリストがくださったのはもう、私の願いの何倍も何十倍もすごいものをくださいましたから、これは本当にありがたい話なんですよ。

あの種蒔きの譬話で「良き地」に落ちた種は実を結んだけれども、その「良き地」とは



何かというと、そういった霊の次元を受け入れるように用意ができていて、そういう魂だと思えます。だから、今まで全くそんな天国のこととか、死後の世界のこととか、いろんな神さまのことを考えたこともない人に、いきなり

「聖書を読みなさい。これを信じてごらん」

なんて言っても、それは水と油で無理なんです。まずそこへ、順番に順序をへて、そういう所へ到達する所まで行かなければならない。そのために神さまがご用意くださるのが試練です。いろんな試練です。

●イザヤ書53章の土台の上に35章

ここに「35」53 (53分の35) と書きました。「53」は十字架の場面です、イザヤ書53章。

「35」は天国の事態です。

「砂漠はサフランの如く花咲き」

というあの天国の世界がイザヤ書35章です。だから、

「53」というものが見えない世界にあつて、それに支えられて「35」というものが花咲く。「35」だけ欲しいというのは無理だよ、しかし「53」だけでは終わらない。

あなたが今、自分は「53」の苦しみの中にあると思つたら、「53」を祈りながら貫いてごらん。必ず「35」が待っているよ

と、私はそう呼び掛けたい。「53」だけで終わりっこないと。キリストご自身も「53」を突破して、あの栄光のお姿で現われて、そして天にのぼられて、今度は聖霊という姿で一人ひとりの所に下つてきて、

「さあ、「35」53 (53分の35) という人生を一緒に歩もうよ」

と。「パラクレートス」という慰め主、助け主は、常にそばにいて一緒に悩んだり苦しんだりしてくださるお方、まさに人生の伴侶です。どうぞ、皆さん、この「35」53 ――「53」を引っくり返せば「35」でしょ――これをしっかりと今日いただいてくだされば、自分が

「あつ、今は「53」の最中だ。がまん、がまん。祈りながら我慢したら、「35」が待っている」

と。いいことが一回あつたら、

「今は「35」の最中だ。しかし、「35」だけでは終わらんよ。やはり人生というのは「53」というのがそこで支えているから「35」が光るのであつて、私には今は

「53」がなさそうだけれども、いずれ「53」がやってくる」

と。そういうことも思つて自戒することが大事でしょうね。だから、この「35」53は小池先生が本当によく話してくださったことでしたけれども、それを今回、私は病床でフツと思いました。大病を煩つて、それで賜つたのが「35」53です。



● 自然の人と、神の霊

さあ、それではもう少し先へ行きましょう。

《福音書の「種を蒔く人」のたとえ(マタイ13章、マルコ4章、ルカ8章)にある「良い土地」とは、「霊なる人」を指す。神の霊言は「霊なる人」に受け入れられて豊かな実を結ぶ。使徒パウロは「コリント信徒への手紙一」において、「神の霊による啓示」につき、次のように語っている。

これはとつても大事なことです。皆さん、これをしっかりとご理解なさったら、あなた方が福音を語って人に受け入れてもらえないのをがっかりしないでいい。「ああ、これが当然なんだ」と。福音というキリストの霊の言葉、霊の世界が、真理が受け入れられるのには、それだけの地盤といえますか、土壌といえますか、そういう耕された所でないとはそれは根付かない。いきなり肉なる人の所へ霊なる言葉は着地できないんですよ。そのことをパウロがここで言っております。

「⁷わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。⁸この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。⁹しかし、このことは、『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された』と書いてあるとおりです。¹⁰わたしたちには、神が¹¹霊¹²によってそのことを明らかに示してくださいました。『¹³霊¹⁴は一切のことを、神の深みさえも究めます。』¹¹人の内にある霊以外に、いつたいただが、人のことを知るでしようか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。¹²わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。¹³そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、『¹⁴霊¹⁵に教えられた言葉によっています。つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです。

¹⁴自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。
ここです。自然の人、生まれながらの人間は、神さまの霊に属する事柄ははねつけてしまう。水と油で、当たり前前だという。これをよく理解すれば、我々が福音をいろいろな方に語って拒絶されても、

「あつ、しょうがないわ。ここに書いてあるとおりだ。そしたら、どうやったらその人たちは受け入れてくれるようになるだろうか。そうだ、神さまは試練をきつとお与えになる。試練をお与えになって、神さまの御名を呼ぶように心を弱めてくださる。砕いてくださる。その時がチャンスだ」



と。その時にもしもあなたの所にまた相談に来たら、その時こそ「時が満ちた。悔い改めて福音を信じなさい」なんて言うチャンスになるというふうなことを私は思いました。

その人にとつて、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。¹⁵霊の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません。¹⁶『だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。』しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています。」(コリント2・7〜16)》

要するに、こつちからはみな分かっているけれども、向こうさんからこつちの方はわからない。それからまた、こつちが語る言葉も向こうさんには通じない。霊と肉との隔たりが大きいからだ。これを理解したら、皆さんが一生懸命に福音を伝えて、

「誰も受け入れてくれなかった。がっかりした」

なんて嘆く必要はない。当たり前なんです、それで。受け入れてくれたら、

「おつ、奇蹟が起こった」

と、そう思ったらいい。

「どうやって準備していただいたんだらう。神さまはどのようなにしてその人の心を柔らかくして、御言みことばが着地できるようにちゃんとしてくださいのだからか」

と、むしろそれを不思議がつて、

「ああ、御名を讃えます。思いがけない想定外のことがありました。御名を讃えます」

と。これだったら、絶対がっかりすることないですよ。だって、私たちの過去を考えてごらん。私だって学生の頃、クリスチャンのやつを見たら、

「なんだあいつは。なよなよして男らしくもない」

なんて思った(笑)。またそんなのが多かった。たくましい益ます荒男あらおというようなクリスチャンにあまり私は遭わなかった。なにか力がなくて弱々しくて、あまりチャーミングでなかったんですよ。

●語り手は主キリスト

その次にいきます。「しもべ聴く、主よ語り給え！」とあります。語り手はキリストだということ。我々は人の言葉を聴くのではない。キリストご自身の御言葉を聴きたい。

Ⅲ 語り手は主キリスト

へブライ人への手紙の初めに、

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、²この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」(へブライ1・1〜2)



とあるように、わたしたちにとって、神の言葉の語り手は、主イエス・キリストである。福音書に記されている主イエスの言葉と御業は、遠く離れた所での、遠い昔のものでありながら、現代に生きるわたしたちにとっても、「永遠の御言葉」としての輝きと重みをもつて迫って来る。パウロの「コリント信徒への手紙二」3章6節に、

「文字は殺しますが、霊は生かします。」

(文語訳では、「儀文は殺し、霊は活かせばなり」)

とあるように、時代的・地理的制約を乗り越えた「霊的な奥義」を受け取るような姿勢が大切であることは言うまでもない。》

だから、不思議でしょ。そんな新約聖書は——旧約聖書よりは新しいに違いないが、それだって——書かれたのが、まず舞台背景がキリストの時代でしょ。それからそれに続く使徒たちの時代でしょ。その時の記録が編集されて、こうやって我々に伝わってきているわけです。もともとはギリシア語だったというんですけれども。それが全然、古いという感じを受けないんですよ、今読んでみても。なにか本当に現代的な感覚で、今、自分に語られているという、そういう言葉として私の中でいきいきと働いてくれる。これは実に不思議だなと思います。

《主イエスは、いつも父なる神の懐に身を委ね、神と一如一体となり、その中から、

「活ける霊の言葉」を語られた。ヨハネによる福音書12章44節以下を引用しよう。

「44 イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。45 わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。46 わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た。47 わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。48 わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。」

これです。「わたしの語った言葉が」、つまり、「あなたの聴かれた言葉があなた自身を裁きますよ」と。せっかく、こつちが真剣に語っているのに、あなたは見向きもしなかった。ポイと投げ捨てた。私はあなたを裁かない。しかし、私を通して語られた言葉自身があなたを裁きますからねと、そういうことです。

49 なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになつ

た父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。」

(ヨハネ12・44〜49)》

だから、皆さんが人々に本気でキリストの言葉を語る時にはこれだけの自覚を持ってお



語りいただきたいんです。

「私の言葉ではないですよ。これはキリストの言葉ですよ。キリストが私を通して語ろうとなさっている。そういう自覚を持つて受けとつてくださればいいし、そうでなかったら、言葉自身があなたを裁くことになるかもしれないよ。それは聖書にそう書いてあるからです」

と。「えっ、脅す気かね」なんて。脅すか脅さないか知らないけれども、やはり言葉というのはそれだけの力があるから。

「言葉は神なりき」

とヨハネ伝の1章1節にありましたものね。

●言葉

今の人たちは、言葉というものは単なるコミュニケーションの手段、記号だと思つていきます。そうではない。言葉には霊がこもつている。言葉と言います。言葉は単なる記号ではない。生命そのものが宿つている神の霊言であるという自覚を持つて、私たちはキリストの言葉を人に伝えたり、語つたりする。そういう時は、

「私はキリストのお使いだ、キリストに遣わされて語るんだ」

と。ちょうどモーセがヤーヴェーの神さまに遣わされて、あのパロの所へ行つて言葉を伝えたとように。

「これは私が語っているのではない。私を遣わされた神さまがあなたに告げよ

と仰るから、語っているんだ」

と、モーセは毅然としておりました。しかし、パロにことごとく拒絶された。でも、最後の手段、それは初子を撃つという奥の手を使われました。それでとうとう、パロはあきらめて、

「では、出て行ってくれ！」

と語つて明け渡したという、あれが出エジプトというお話ですね。

私たちが福音の言葉を携えて人々の前に立つときには、それだけの自覚を持つて、

「これは人間奥田の言葉ではない。人間奥田に託されたキリストご自身の言葉である。それを私はお取り次ぎするだけである。言葉の取り次ぎ店。しかし、それはその言葉がまことであるということを感じているから取り次ぎするのであつて、単に郵便配達人ではありません。封筒に入っているものを渡しているのではない。私自身の中に消化された言葉、それを私の言葉としてお語りします。でも、背後にはキリストさまが付いておられます」

と。そういう気持ちで私は人々に語ります。講演会でも同じです。だから、ここに、
《⁴⁸わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがあ



る。

と。わざわざ傍点を付けたのはそのことです。

わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。⁴⁹なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。⁵⁰父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」(ヨハネ12・48〜50)《

よく、小池先生は「無者キリスト」ということを言われました。

「キリストはからっぽだ。父なる神さまがキリストの中で語り、御業をなさっているだけだ」

と。だから、ご自分はからっぽだから、「無」「無者キリスト」と言われました。それがここに書かれていることです。

私は思いますのに、現代の人によく分かってもらおうと思って、自分の知恵を混ぜたり、なにか現代にマッチするようにモデアイ(一部を修正)したり、アレンジする、編曲する。それはよくないですね。このまんま、御言のまんまお伝えすることです。

「私はそれをリアリティとして受けとっていますから、だからぜひ、あなたもご自分の生活の中で、これをいつの日か、リアリティとして受けとってください。もししたら、力がきますよ」

と、そういうふうには語りたと思っています。

●神(キリスト)の言葉は人を活かす

その次に行きます。

《IV 神(キリスト)の言葉は人を活かす。

わたしたちの肉体が飲食によつて維持されるように、わたしたちの「霊の生命」は「神の口から出る一つ一つの言葉(霊言)」によつて生きる。これなしには枯渇する。旧約聖書の中の「アモス書」に、

「見よ、その日が来ればと主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渇くことでもなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ。¹²人々は海から海へと巡り、北から東へとよろめき歩いて、主の言葉を探し求めるが、見いだすことはできない。¹³その日には、美しいおとめも力強い若者も 渇きのために気を失う。」(アモス8・11〜13)

とある。》

これは御言葉の飢饉ということ。我々は身近に聖書がある。全国どこの書店に行っても聖書は——どこに行っても聖書が置いてあるかは知りませんが——とにかく、聖書



はベストセラーだと言われています。ギデオン協会の人たちは一生懸命に配っています。けれども、そういった印刷物があるから、

「では、それを開けば自然に入ってくるか」

というと、そうはいきません。これは霊なる言葉ですから。この霊言、生命の言葉というもの、しかるべき備えがされて、良き土壌にそれが入りこんでいって、根をおろして初めて実を結ぶという、そういうたぐいのものであります。そんなそこの三文小説とは話が違ふ。

私は、言ったらわるいけれども、あまり小説を読む気になれんです。その人たちが本気で聖書を生き抜いて、そしてなにか小説をお書きになったら、私は必死になって読みます。でも、聖書もまともに読んだこともない人がどんな小説を書こうと、せいぜい自分の人生の経験を書いていただけじゃないですか。結局、自分の世界、自分のワールド、自分の経験した世界——それは読書もなさっているでしょう、いろんなものを読んでいっているでしょう、たくさんものが入っているでしょうけれども——所詮、この世の知恵ではないですか。

本気で聖書を読んで、これを身に体して、その中から書くような——私はドストエフスキーとかトルストイなんかのものはきつとそういうものだと思う。あの方々は必死になって聖書とつくんだ。そこから生まれ出たものがドストエフスキーの作品、トルストイの作品になって表われた——そこに永遠の質があるのではないかと思えます。たくさん読んでないので、えらそうなことを言う資格はないんですけれども。

やはり、本気でこの聖書とつくんで、そこを突き抜けて、そして自分の人生経験とかいろんな社会的な経験とか、それをいろいろ取り込みながらお書きになったものならば、私も読ましてくださいと言いたいですけれども。それも何もない方が、たかが自分の小さな人生経験とやらんな文献研究で培った知識ちかをいろいろまぜこぜにして何か作品を作ったって、私は

「ああそうですか。それだけのことですか」

なんていう、変な気持ちを持つてますので——こんなことを言うと、何々賞とかいろんなものを貰われた作品に対して申し訳ないですけれども——なんだか読む気が起ころないですね。皆さんはいかがですか。さかんに「読書せよ、読書せよ」と言うけれども、

「私の読書は聖書です。聖書もまともはまだ読書できてないのに、他のものまで手が伸びませんよ」

と。私はヒルティのものによく読みます。小池先生のものなんかも読みます。その人の系統のものはひとりで読んでしまっても、そうでない世界のものをあえて無理して読もうという、そこまでまだ私は成熟しておりません。時間もありませんし、結構忙しいものですから。

皆さんはいかがですか。普通なら、定年になつたら、時間があり余つてしょうがないと



仰るけれども、私は絶対にそんなことはありません。学者の世界ではまだ現役です——現役と言ったら失礼ですけども——やるべきことが残っていますのでね。民法学者としてしなければならぬことがちゃんとあります。そのことと、それから、集会を京都でやっていますし、今までは東京へも出てきてやりました。

もう講演会は今日でおしまいですけれども。そういうふうにして、いろんなものを抱^かえ込んでいる人間ですから、そんなあつちもこつちも手を出すなんてとてもできない。スポーツもやっていますからね。「皇居を走る会」なんてのもやっていますし。これは今回は、もう身体がいうことをきかなかつたから、さすがにお休みしましたが。そういうふうなことで、けっこう忙しいんですよ。

●パンの問題

次に行きます。

《主イエスは、あの「荒野の試み」において40日40夜断食した後、悪魔が来て、

「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」

と誘惑したのに対して、

向こうの石ころというは軽石みたいなものらしくて玄米パンなんか非常に似た恰好で、見たところちよつとよく似ているそうです。

「あなたは神の子なんだろう。40日40夜断食してご苦労さん。もう胸と背中がくつついていないじゃないか。さあ、そこに転がっている石ころをパンにして食べてみたらどうだ。人々は喜びますよ」

と悪魔は誘ったわけです。それに対して、

『「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある。』

とお答えになつて、悪魔の誘惑を断固として拒絶された。英文訳聖書では、「人はパンだけで生きることができない。」とある。

「キャノット リブ」と書いてある。パンだけで生きろと言つたつて無理だよと。「神の口から出る言葉、神の霊言、これで初めて人間の霊は、霊の生命は生きることができると、英文では書かれています。

霊の命にとって「神の口から出る霊言、命の言葉」がいかに大切かを教えている。

主イエスはヨハネ福音書の中で、

「命を与えるのは、霊である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたが

たに話した言葉は霊であり、命である。」(ヨハネ6・63)
と宣言しておられる。》

この6章はものすごく大事な所です。「マナ」の話がたくさん出てくる箇所です。ちよつ



とヨハネ伝6章を読んでききます。

「その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。²大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。³イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。⁴ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。⁵イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、⁶こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。⁷フィリポは、「めいめいが少しづつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。⁸弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。⁹「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」¹⁰イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。¹¹さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。¹²人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。¹³集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠かごがいっぱいになった。

ありえない話ですよ。少年が持っていた五つのパンと二匹の魚——お母さんが「さあ、これを持って行きなさい。一昼夜かかるかもしれない。しっかりお話を聞いておいで」と言っ
て持たせたのでしょね——少年はそれを差し出した。これはえらい少年ですよ。自分のものだと言って隠しておかないで、「どうぞこれを」と言っ
て。キリストはそれを受けとってお祈りなさると、こんな奇蹟みわざの御業みわざが起おこった。まあ凄いですね。考えられないでしょ。
五つのパンと二匹の魚が、分かち与えて、分けても分けてもどんどん増え広がって、男だけ
で五千人いたというのですから。その五千人が満腹して、「パン屑を集めなさい」と言わ
れたら、十二の籠かごがいっぱいになったという。これは不思議な本当に素晴らしいことです。
皆さん、本当に驚かれませんか。

¹⁴そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に
来られる預言者である」と言った。¹⁵イエスは、人々が来て、自分を王にする
ために連れて行くこうとしているのを知り、ひとりでもまた山に退かれた。」(ヨハ
ネ6：1〜15)

人々の魂胆は、「この人を捕まえておけば、もうパンの問題で苦しむことはない。常に必



要なものはこちらと出てくる。打ち出の小槌だ。これを捕まえておこうよ」と、そういうのが人々の魂胆です。

●永遠の命に至る食べ物

「夕方方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。¹⁷そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。¹⁸強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。¹⁹二十五ないし三十スタディオンのばかり漕ぎ出したところ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。

「幽霊だ！」と。

²⁰イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」²¹そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

²²その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。²³ところが、ほかの小舟が数そうテイベリウスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。²⁴群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。²⁶イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。

こういうのが多いんですね。御利益で人々はイエスを求めている。イエスは徴としてなされた。徴というのは、その先に大事なものが隠されている本体のその徴。パンの奇蹟を通して何が示されているのか、それをしっかりと受け取りなさいということです。それを無視して、とにかくパンが欲しいからというので集まってきた。浅薄な話です。

「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べた満腹したからだ。こんな朽ちる食べ物、パンなんてどうせ食べたらまたお腹がへる、また食べる。同じことの繰り返しだ」

と。

²⁷朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。

もし働くようになったら、そんな朽ちるパンのためにあくせく働くということではなくて、つともつと高い理想を持って、



「今こういう労働に携わっているけれども、その労働を通して自分たちはもつと本
当の生命の世界へ近づいていくんだ、祈りをもって働くんだと、そういう働き方
をしなさい」

ということ。

これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」²⁸そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、²⁹イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、

つまり、「私を信じること」

それが神の業である。」³⁰そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。³¹わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」³²すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。³³神のパンは、天から降^{くだ}って来て、世に命を与えるものである。」

³⁴そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うくと、³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのものに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴^{かわ}くことがない。³⁶しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見て信じているのに、信じない。³⁷父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのものに来る人を、わたしは決して追い出さない。³⁸わたしが天から降^{くだ}って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。³⁹わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。⁴⁰わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(ヨハネ6・16〜40)

● 我を食らえ、我を飲め

これに対して皆は、「これはヨセフの子どもだ」なんてまたゴチャゴチャ言い出した。そのへんは飛ばしまして、47節、

「⁴⁷はつきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸わたしは命のパンである。⁴⁹あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。



50 しかし、これは、天から降^{くだ}って来たパンであり、これを食べる者は死なない。
51 わたしは、天から降^{くだ}って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

52 それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。53 イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。57 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。58 これは天から降^{くだ}って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」59 これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

ところが、この話を聞いた弟子たちは喜んだかと思つたら、そうじゃないんです。60 節、60 ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか。」

私たちは、「イエスの弟子」というと、つい十二弟子を思いましますけれども、もつともつと十二弟子の他にもいろいろな弟子たちがいたんでしようね。

61 イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。62 それでは、人の子がもいた所に上^{のぼ}るのを見るならば……。」

私はまた天に上^{のぼ}っていくと。

63 命を与えるのは『霊』である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」(ヨハネ 6・47〜63)

ここで、

「命を与えるのは『霊』である」

という。霊の次元のもの、それだけが本当の永遠の生命につながる。ところが、肉の次元というのは、パンとか肉体にかかわるこの地上の事柄です。これは肉体の命をそれなりに養う。また必要でしょう。しかし、それだけのものだ。

「あなた方はこの肉の命、地上の命、地上の次元だけで満足しているなら、それはそれで終わりだ。人は土から出て土へ還^{かえ}る。土から造られたものは土に戻っていく。」



ところが、あなた方はそんなレベルでいたらいけない。あなた方は土から出た人間でありながら、霊の生命というものを、霊の次元の生命をいただくように招かれていゝるんだ。土から出た人は土へ還る。これは当たり前のことです。自然現象だ。でも、自然現象を超えた、霊から生まれたひととして霊の次元に帰っていくという、それを私を通して受けとる。これが、

「我を食らえ、我を飲め」

ということだ。もし私というものを本当に飲み、食らわなかったら、あなた方は土から出て土に還る、単なる自然の世界の一部にすぎない。動物たちもみなそうだ。ずっと昔からそれでやってきた。しかし、神さまは今、それを突き抜けた、本当の神さまの霊の次元の、本当の生命、永遠の生命を与えようとして、わざわざ私を地上に送られた。私はもともと天上で神さまと仲良く暮らしていた。本当に仲むつまじく。ところが、ご命令を受けて地上にくだって来たんだ」ということです。

●派遣社員

よく「派遣社員」と私は言いました。

「世の中を救え、世の人たちを救い出せ。あの人たちはこの地上の命でフウフウ言っている。しかもどんなにあくせく働いても結局は土に還っていく。天の永遠の生命とは無縁な生活の中で呻吟しんげんしている。お前は出掛けて行って、あの人たちの中に本当の永遠の生命の世界を示してやれ。それが私がお前に与える命令である」と。そうやってキリストは地上に來られたんでしょ。だから、ヨハネ伝では、神さまのことを何と書いておられるか。

「私をお遣つかわした父なる神」

と言う。たえず、「私をお遣わしになったお方」と書いておられます。自分がひとりで来たとは書いておられない。

「私はその方の御意みこころに即して、ご命令に即して地上にやって来た。あなた方はモーセの言葉を聞く。モーセは神から遣わされたということに信じて疑わない。そしてモーセの言うことを聞く。だったら、私は神さまからじかじかに御声を聴き、生命を受けとって、そしてその生命を与えようとしてやって来た。マナを与えたのはモーセではない。神さまがモーセを通してマナをお与えになっただけだ。ところが、マナを食べた者はみんな死んだではないか。でも、私というこの生命を食べる者は死なない。永遠の世界、神さまの生命の次元を賜る。こんなことは未だかつて開闢かいびやく以來なかったことだよ」

と。そう思われませんか。



アブラハムだってみんな地上の命を終わるとみな墓に葬られました。しかし、アブラハムの霊はちゃんと神さまの所へ行きましたよね。皆さん行きました。モーセも行きました。けれども、それはキリストが支えておられるから。キリストがアブラハムの罪も、モーセの罪も全部ご自分がひつかぶって引き受けておられるから、「53」(イザヤ書53章)になつてくださったから、彼らは「35」(イザヤ書35章)をいただいたんです。そのキリストがここで、「私を食らえ、私を飲め」

と仰った。「はい、ありがとうございます」と、どうして言えないのか、弟子たちですらも。「ひどい話だ、聞いていられるか」

なんて、弟子どもは言ったというんですね。結局は、弟子たちはお側そばにはべっついていても、本当のことは何もわかっていない。目覚めたのは、ペンテコステで初めて目覚めたんですよ。それまでは、肉の次元に住んでいて、イエスさまとの間是一緒にご飯を食べていても、水と油みたいな存在です。イエスさまはそんなことは分かっているから、特にペテロに対して、

「みんな躓つまずく。でも、あなたが立ち直ったら他の者たちを勇気づけてやってほしい。あなたのためには特別に私は祈ったから」

ということをちゃんと十字架の直前に言っておられるんです。

「いやいや、先生を見捨てるなんてことは絶対にはいたしません。他の弟子どもは頼りないからだめです。私にかぎって言えば、もう命も捨てます」

なんて偉そうにペテロは言った。

「そうか、よくわかった。まあ気持ちはありがたいけれど、あなたは鶏が鳴く前に二度私を呑むよ」

と。そのとおりになったではないですか。ペテロが三度否んだ時に鶏が鳴いた。ペテロはさめぎめと泣いて涙を流したという。それで、

「生命を与えるのは霊だ。肉の次元ではだめなんだ」

と。どんなにペテロが自分で強がりを書いてみても結局は、ペテロはまだ肉の次元から脱却できていませんから、キリストはそれをちゃんと見越して、

「いずれあなたは本当の次元に入る時がくる。その時になったらあなたはリーダーだ。しかし、あなたはとんでもない死に方をするよ」

ということまでヨハネ伝の最後の方で言っています。手を縛られて望まない所へ引っ張って行かれるよと。そういうようなことが出てきます。(ヨハネ21・18)

「命を与えるのは、**霊**である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は**霊**であり、**命**である。」(ヨハネ6・63)

と。そこをこのプリントでは引用したわけです。



● 良い羊飼

それから、羊飼いのことも引用しました。

《また、「良い羊飼」の譬えたとにおいて、

「³門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。⁴自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのです、ついて行く。⁵しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」(ヨハネ 10・3～5)

と語っておられる。そして、さらに、

「¹⁰……わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。(中略)¹⁴わたしは良い羊飼である。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。¹⁵それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。(中略)¹⁸だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟おきてである。」(ヨハネ10・10～18)

と。》

私はこの「掟である」という言葉よりもむしろ、「定めである」と言いたい。

「私の定め、私の運命、私が父から授かった私の運命というのはこういうことなんだ。羊のために命を捨てる。誰かが無理やりに奪いとるのではない。自分から捨てるのだ。私は自分で捨てる権もあり、また受けとる権もある」

と。自分の主体性ですね。神さまの前には平伏ひれふします。けれども、サタンとか、パリサイだとか、いろんなご連中に対してはキリストは毅然きぜんとなぎっていますよ。

「ユダが兵士たちを引き連れてイエスを捕らえようとしてやって来たとき、イエスが『わたしである』と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた」

(ヨハネ18・2～6)

と書いてあるくらい、それだけの権威をお持ちでした。

● 神・キリストの栄光のために働く

ではまた次へ行きます。「しもべ聴く、主よ語り給え！」と、何のために聴くんですかと。それは、

《V 御言葉を聴くことは神・キリストの栄光のために身を献げて働くためである。楽隠居するためではありません。御言を聴いて、それから始まるんですよ。だって、モ―セだってそうじゃないですか。80歳になつてから召集令状がかかってきたわけですよ。



40歳から40年間、ミデアンの荒野で砂漠の向こうでチツポラという奥さんと子どももできず、本当に平和な田園生活を楽しんでいた。そしたら80歳になって召集令状がかかってきて、それから40年間働いて120まで生きた。だから、私は

「80を過ぎましたから引退します」

なんて言えませんわ。モーセは80から始まったんだから、これからなんだ。

「120までやらせられるんですか、それは勘弁してよね」

なんて(笑)。つまり、「御言葉を聴く」のは神さま、キリストの栄光のために働くためである。

主イエスは、サマリヤの女と語り合っておられる間に町に出かけ、食物を手に入れて戻って来た弟子たちが、「ラビ(先生)、食事をどうぞ」と勧めたのに対し、

「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある。」

と、まるで弟子たちと話が合わないんです。それは何かといいますと、

「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」

とお答えになった。》

サマリヤの女と問答をしておられるあの場面を想ってみてください。昼日中、一番暑い時にイエスも旅に疲れて、どっこいしょと井戸のほとりに腰を下ろされた。私は小池先生に言ってみよう。先生はいつも

「私は疲れたことは一度もない。眠くはなるさ。しかし、疲れはしない」

と言っている。それで私は、

「サマリヤの女の所を見てください。『イエスは疲れた』と書いてありますよ」

と(笑)。ヨハネ4章6節に、

「⁶此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う。

と。うれしいね、これを読んだら。「小池君、君はどうだね」と、キリストが聞いておられますよ。本当に私は、イエスさまは疲れられたと思う。

「ああよかった、泉がある。でも、自分で汲み上げて飲むほどの元気も、気力もないわ」という、まあそういうふう勝手に自分にならずらえて解釈します。

時は第六時頃なりき。⁷サマリヤの或女、水を汲まんとて来りたれば、イエス

之に『われに飲ませよ』と言いたもう。

女の方はびっくりして、ユダヤ人とは絶交になっていたのに、それを親しく「飲ませてくれ」なんて言うことで話が始めたわけです。イエスの方は、

¹⁰イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」という者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活け



る水を与えしものを』

と。話がスレ違っていますけれども、そういうスレ違った話のあとで、ものすごく大事なことを言われた。

¹³ イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴ 然れど我があたる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』¹⁵ 女いう『主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』(ヨハネ4:6~15)

「この井戸の水を飲む者はまた渴くだろう。しかし、私が与えてあげる水を飲む者は永遠に渴くことがない。それどころか、その人の中で泉となつて永遠の生命の水が湧き出るよ」

と。サマリヤの女には永遠の生命なんかわからない。だから、「ああ、そんな結構な水ならどんどんどください」なんてなことを言つて、そこでいろいろ問答が起りました。

● 苦しみの中に輝きが生まれる

《わたしたちも、神(キリスト)の御言葉を聴き、これを体受したならば、神・キリストのご栄光が顕われるようにと願い、祈り心で、賜った使命(天職)・課題に取り組むべきである。》

主イエスが山上で変貌される前に、御自身の受難と復活を弟子たちに告知されたときに語られた言葉…

「²⁴ ……「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい。²⁵ 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。²⁶ 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失つたら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。²⁷ 人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。」(マタイ16:24~27。マルコ8:34~38、ルカ9:23~26)》

と、こういうことを言っておられる。

「誰でも私についてきたいと思うなら、己を捨て、己が十字架を負いて我に従え」

とキリストは言われた。だから、クリスチャンは苦難を避けることは絶対できないんです。

「⁵³ (イザヤ書53章)を避けることはできない。」

「私に従つて来たい者は自分を捨て、自分の十字架を背負つて、私に従つて来なさい」

というのがまず「⁵³」でしょ。これを覚悟して来なさいと。



「²⁵自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。²⁶人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。²⁷人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いる」

と仰った。これは終わりの時のこと、再臨の時です。だから、我々がクリスチャンにされたのは、怠けていい生活を送るためではないということ。本当に私の弟子たらんとする者は、この「35」53 (53分の35) を自分の中にしっかりと受け入れていきなさいと。「53」(イザヤ書53章)があれば必ず「35」(イザヤ書35章)がある。苦しみの中に輝きが生まれてくるから。苦しむばかりなんてありえない。それはもうご自分の、皆さんそれぞれの生活で味わっていた。

「この「35」53」を、奥田先生は2016年7月17日、新宿集会の最終回講演で話したけれども、これは本当だったな」

と。皆さんのこれから、天に召されるまでのご生涯の中でこれをしっかりと思い起こして、またいろんなことで悩んでいる方には、

「人生は「35」53」だよ。「53」は苦しみ、「35」は天国。片一方だけではないんだ。

必ず両方がある。天上の世界に行ってしまったら、「35」だけ。天上の世界では

「35」だけですよ」

と。けれども、地上にいる間は、我々はたえず試練の時期なんです、修練を修行させられているんです、地上で。我々は肉体を宿にしています。肉体というのは非常にわがままですから、

「あれが食べたい、これが食べたい、あっちへ行きたい、こっちへ行きたい」

と、欲求不満のかたまりみたいなのが我々の生まれながらの肉体ではないですか。やはり、地上には地上の法則があるのだから、肉体を宿としている時は、その肉体の法則を大事にしないとだめです。

それは大病を煩^{わずら}ってわかりましたよ。大病なんて人それぞれのもです。本当に生きるか死ぬかも大病ですし、私みたいに十日間ほどゴホンゴホンなんてやっているのも大病です。人さまぎまですから、そこで生み出したのがこの「35」53」というこの真理です。生み出したというより——小池先生が言っておられたのが目覚めた——それがもう一度^{よみがえ}甦^つてきたということですよ。

●天の父の御心を行う者

その次に行きましょう。

《御言葉を聴いて行うことの大切さは、マタイ福音書7章21節に、



「²¹わたしに向かつて、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」(マタイ7・21)

とあり、同24節〜27節には、

「²⁴そこで、わたしのこれらの言葉聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。²⁵雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。²⁶わたしのこれらの言葉聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。²⁷雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」(マタイ7・24〜27)

とある。》

まあ、今の時期にこんな箇所を読むというのは残酷かもしれませんが、熊本の人たちのことを思いますとね。九州の人たちは本当に雨の災害で大変な目にあっておられる。土砂災害、土砂崩れ、土石流、そういうことで苦しんでおられますから、そのことを決して私は忘れはしません。しかし、キリストはここでこんなことを言われた。

「主よ、主よ」なんて口先で呼んだつてだめだ。受けとつた言葉をしっかりと実践する。御意を行う。それでなければだめだ」

と。賢い人と愚かな人との対比がここで語られた。

《ルカ福音書6章46節〜49節では、次のように語られている。

「⁴⁶わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。⁴⁷わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているかを示そう。⁴⁸それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかりと建ててあったので、揺り動かすことができなかった。⁴⁹しかし、聞いても行わない者は、土台なしで地面に家を建てた人に似ている。川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方がひどかった。」(ルカ6・46〜49)》

賢い人というのはまず岩の上に自分の家を建てる。岩盤の上にとしっかりと家を建てる。砂の上に建てる——「砂上の楼閣^{ろうかく}」という——砂の上に建てたものもろい。お天気の時はいいいけれども、大風が吹き雨が降り、川が流れてくると、たちまち流されてしまう。ところが、岩盤の上にとしっかりと建てられた家は流されないというのがこのルカ伝です。

マタイ伝では、「岩の上」というけれども、岩はどこにあるか書いてない。単に「岩の上に」とある。ところがルカ伝では、「地面を深く掘り下げ」て岩盤にぶつかって、その掘り下げてぶつかつた「岩の上に土台を置いて家を建てた」と言っている。言うまでもなく、「岩」は我々にとってはキリストご自身です。



キリストという土台の上に我々の生活を築いていかないと、単なるこの地上的な幸いというものの上に生活を築いても、それは一瞬にして崩れ去るかもしれない。地震が来ても、大風が吹いても、どんな天変地異があっても、びくともしないものは、これは見えるものではない。見えないもの、そういうものでなければならぬと、私は思います。

このルカの6章46節から49節には、

「地面を深く掘り下げ」

とある。マタイ伝やマルコ伝ではそれが抜けている。ルカでは、

「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てる」

と書いてある。そうになると、たとえ洪水がやってきても、びくともしないと。しかしながら、ただ御言葉を聞くだけで、全然実行もしない人は、土台なしで地面に家を建てた愚かな人と言つていいだろうと。

「しかし、聞いても行わない者は、土台なしで地面に家を建てた人に似ている。

川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方がひどかった。」

と。つまり、御言葉を聞くということ、我々が福音を聞くということ、クリスチャンになるということはそれだけの使命がある。使命を果たさなければクリスチャンではないと。そういうことを強調したいと思います。

●使徒たちの言葉も受けとる

それから次は付け足しになりますが、

《VI 新約聖書の使徒たちの言葉も、主キリストの御言葉に準じて受け取ることができる。》

福音書はキリストの言葉と行為があふれています。けれども、それ以外はどうなのか、それも神の言葉なのか。私はやはり神の言葉として受けとってくださいと申したいわけです。

パウロの「ローマの信徒への手紙」(ローマ書)、「コリント信徒への手紙一」(コリント前書)「同二(コリント後書)」、「ガラテヤの信徒への手紙」(ガラテヤ書)、「フィリピの信徒への手紙」(フィリピ書)、パウロの作品であるかどうかが争われているものの、内容の深い「エフェソの信徒への手紙」(エペソ書)・「コロサイの信徒への手紙」(コロサイ書)の内容も有益である。

「エフェソ」「コロサイ」は、果たしてパウロのものかどうかということに聖書学者たちは疑っています。いろんな角度から検討して、パウロ自身のものでないというのがだいたい定説になっているようです。しかし、内容は素晴らしい。

また、「使徒ヨハネの手紙一、二、三」も、「ペテロの手紙一、二」も大切な内容が記されている。



なお、忘れてならないことは、これらの御言葉に聴くに当たって常に、「聖霊（御

霊）」の導きを求めて、その御言葉、語りかけに聴く、という心根が大切である。「御霊の主さま、どうぞ今日、聖書を開いてでくわす言葉、聖書を通して私に語ってください」を添えてくださいますように、お導きをくださいますように」という、そういう祈り心で読んでいく、聴いていくということが大事である、ということを書きました。

わたしは、ヨハネ福音書の14章から17章までの主イエスの御言葉に常に立ち返りたいと願っている。また、同じく大切なのは、パウロのローマ書8章の全部である。

この、いずれにおいても、導き給うのは、御霊の主、聖霊さまであることが強調されている。「ヨハネの手紙一」に

「²⁰しかし、あなたがたは聖なる方から油（聖霊のこと）を注がれているので、皆真理を知っています。」（ヨハネ一2・20）

とあり、また、

「²⁷しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教えを受ける必要がありません。この油が万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい。」（ヨハネ一2・27）

とある。》

つまり、当時はいろんな偽キリストみたいなの、偽キリスト教みたいなののはやったんです。ヨハネは手紙の中で、

「あらゆる霊を信じてはいかん。イエスが肉体をとって来られたということをお告白する霊はまともな霊。しかし、それを告白しない霊は信じてはいかん」

とかいうことをヨハネ第一の手紙でちゃんと書いてます。そういう背景があるものですか、ここで、

「いろんな人の言葉に惑わされないで、むしろ聖霊さまの導きに身を委ねていきなさい。聖霊という油があなた方には注がれているんだから、そのお方の導きに身を委ねていきなさい」

ということを勧めているわけです。だからといって、たとえば、

「もう小池先生の話の話を聞かなくてもいい。聖霊が教えてくれる」

と、そんなことでありませんから。その語られていることが本当に聖霊から発している言葉が語られているのか、単なる人間の言葉が語られているにすぎないか、それを見分ける力をちゃんといただけます。

《ローマ書8章においては、



「¹⁴神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。¹⁵あなたがたは、人を奴隸として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によって、わたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです。我々は「主さま」と呼びますけれども、

¹⁶この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証してくださいます。¹⁷もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」(ローマ8・14〜17)

と、輝かしい勝利を謳っている。》

「共に苦しむ」面が「53」、「共にその栄光にあずかる」面は「35」。「35」「53」(53分の35)がこへ出てきてます。こういう勝利を我々は賜っています。

●各人で「御言葉集」を作成

そして、最後に付け足しですが、

《Ⅶ 各人で「御言葉集」を作成すること

これまでの人生のさまざまな体験や歩みの中で、支えとなった御言葉や聖書の箇所を抜き書きし、各人の「御言葉集」を作成すると良い。》

各人でどうぞ、「御言葉集」を作ってください。確かに聖書も便利です。私も書き込みをしたり、色を塗ったり、いろんなことをしてもう身体の一部にはなっているんです。それでいながらやはり私も自分で「御言葉集」を作りたいなと、何度も思っている。こんな状況の時にはこういう御言葉が私を支えてくれた。こんな時にはこの御言葉が本当に私にとつての力になった。そういういろいろな体験が皆さんにはあるはず。それを、「何月何日、ガラテヤ書2章20節」とかね、「何月何日、ヨハネ伝14章何節」とか、そんな形で書くもよし。しんどかった時にはこういう御言葉で私は支えられたと、いくつかの御言葉を集めてくる。こんな時はこうだったと、それでもいいし。

とにかく、こういった聖書の他に自分なりの「御言葉集」をお作りになる、これが非常に素晴らしいことではないかと思えます。まあそれを付け足しとして、今日は終わろうと思えます。

今日は「しもべ聴く、主よ語り給えー」から始まったんです。

「しもべ聴く、お語りください。はい、どうぞ御言葉を語ってください」

と。それが現代の私たちにとってはやはり新約聖書、これがまず私にとっての第一の御言葉ですし、それから旧約聖書。新約聖書を生み出した背景になっている旧約聖書です。この中にも、創世記、出エジプト記、申命記、それからイザヤ書、エレミヤ書、小預言書、いろんな素晴らしいものが隠されています。こういう素晴らしいものを引っ張り出してく



る。そして、自分なりのそういう「御言葉集」というものを作っていく。旧約に関してはまだやってませんので、自分もこれからやろうと思っっています。では、今日はこれで終わることにいたします。

● 祈り

それでは、一言お祈りいたします。

主さま、今日は新宿におきますしもべにとつての最後の講演会でございました。今日来られた方は幸いです。招きを受けながら、「そのうちに行くさ」と思っていた方は完全にシャットアウトです。福音とはそのような厳しい世界です。

「招かれた者の中から選ばれる者は少ない」

と、どこかにはありましたが、本当に今日ここにお集まりの方々は、あなたに招かれ、招きに応じて、「はい」と言っただけで直ちに従ってきた、そういう主の弟子たちと同じ姿でございます。あなたはそのような方々に対して聖霊を惜しみなく注ぎ、そして、あなたのしもべ、はしためとして、御名のため福音のためにお用いください。そして、大事なことは日常における日々の生活、家庭生活でございます。職業生活でございます。私たちにおいては、これだけは例外という時間はありません。常にあなたが共にいて、共に歩み、一緒に苦勞してください。一緒に喜んでくださる、一緒に涙を流してください。一緒に「35-53」を味わってください。そのような友でいらつしやいます。

「もはやあなた方をしもべとは言わない。友である。私のことを全部知らせた

からだ」

と仰いました。そして、

「あなた方は行って、豊かな実を結ぶようと、あなた方を選んだ、立てた」

と仰いました。

どうか、ここにお集まりの一人一人は本当に主にあつて召され、見いだされ、用いられ、これからのいよいよ御名のために働く使命をいただくことができました。どうぞ、その使命を十分にご自覚いただき、この新宿集会、小池牧子さんが中心になって、いろんな兄弟姉妹によって支えられているこの小さな集いでございますけれども、あなたがご臨在くだされば天下無敵であります。

主さま、「自分は小さい」とか、「自分たちはまだまだ」とか、決してそんなことはありません。主さま、万軍の主であるあなたが付いておられます。あなたが働き給います。主さま、どうぞ、そのようにしてこの群れを用いて、御業をどうぞ展開してください。

尊び奉る主イエス・キリストの御名を通してこの感謝と讃美と祈りを御前にお献げいたします。アーメン！

